◎野木京子　6月

「座右の銘」なんて必要か
と思いながらも
少し憧れて歩いた
就活中のビルの中　　風船（東京都）

＊座右の銘は、自分が生きていくうえで大切にしている言葉のこと。そういう言葉ならきっとだれでも持っているはずなのに、面接官から改まって問われると気まずくて困ってしまう。気持ちがよくわかる。

長袖か半袖か上着はいるか
考えて考えて
今日も一日家にいる　　茶和鈴（東京都）

＊ユーモラスでちょっぴり切ない。家から出られないその理由はなんだろうとつい考えてしまい、切なくなる。

自分の全身骸骨には
お礼も言えない
一番お世話になっているのに　　風船（東京都）

＊風船さんのこの詩にも共感。いまだ見たこともない触れたこともないわが骨を、そっとさすってお礼を述べてみたい。歩くことも座ることも、寝ることだって、骨のおかげだから。

死ぬ前の蛇は無限のかたちして　　細村　星一郎（東京都）

＊己の尾を噛んで環となったウロボロスだろうか。終わりもはじまりもない不死の形だから、この蛇は再び生まれ変わるのだろう。細村さんの詩は静かで広がりがある。

さくらんぼの一つ一つに
種の夢があることを
忘れてはいけない　　はすた（富山県）18 歳

＊さくらんぼの種の一つ一つに夢が詰まっているという新鮮な発想。地面から芽を伸ばしたいという夢を持っているのに、人間は無造作にゴミ箱に捨ててしまう。

不確かな明日が靴の底で眠る　　まちりこ（埼玉県）

＊明日をつかまえることは永遠にできない。今日歩いている靴の底に明日が隠れているという卓越した発想が楽しい。まちりこさんの詩は、日常のちょっとしたことから発想を得て、永遠という大きなものを見せてくれる。

ワンピースは
いつも長くするの
空から落っこちてくる
子どもたちを包むために　　翠（東京都）

＊未生の子どもたちは空のどこかに隠れていて、生まれる順番が来ると地上に落っこちてくる。落下した時に痛くないようにドレスの裾で拾い上げたいという優しさがうれしい。

丸善のレモン置き場
憧れが霧散する音がした
もっと鮮やかに散りたかった　　岡田　佳子（京都府）

＊梶井基次郎『檸檬』の舞台である丸善は 1920 年代の丸善。蛍光灯や LED で照らされた現代の書店とは違い、ほの暗かったはず。せめて失望だけでも、レモン爆弾のように鮮やかに散りたかったという、最終行が面白かった。

忘れているだけで
きっとまだある

あの日の　市民プールの　青空　　まちりこ（埼玉県）

＊青春の日の、あるいは幼年の日の美しい青空を、今もまだはっきりと覚えていて、その記憶は宝物。生きるということは、大切な宝物を次から次になくしてしまうことのようだ。

今ならば
智恵子の気持ちがよくわかる
あまりに遠い故郷への道程　　加藤 美紀（愛知県）

＊智恵子が愛した福島の空と、安達太良山。「ふるさとは遠きにありて思ふもの」は室生犀星の詩行だが、故郷は遠くてなかなか行けない場所になったときこそ、切なさと愛しさがこみあげてくる。「道程」という高村光太郎の詩の言葉をさりげなく使っているのも面白かった。